

知 識 探 訪

多民族社会の横顔を読む

サバ州にインドネシア人中学校

外国人労働者問題の解決に一步か

西芳実(立教大学・助教)



サバ州コタキナバルのインドネシア人学校の授業風景

サバ州コタキナバルに、インドネシア人が学ぶ中学校が開設されることになった。このことは、マレーシアの外国人労働者問題の解決にとって重要な一步となりうるものだ。

教育の対象となるのはアブラヤシ農園などで働くインドネシア人労働者の子どもたちだ。インドネシア当局の調べでは、就学年齢にあるインドネシア人の子どもたちはサバ州だけでおよそ2万5,000人いる。今回開設される中学校では、それらのうち合法的な滞在資格を持つ130人から150人の生徒を受け入れる。インドネシア国家教育省が定めるオープン・スクール方式を採用し、教員はインドネシアから派遣される。

インドネシア人はマレーシアにおける外国人労働者の主要な部分を占める。農園や工場の労働者として、また家事労働者として百数十万人ともいわれるインドネシア人がマレーシアで働いている。同時に、インドネシア人労働者はしばしば社会問題として話題になってきた。雇用主による搾取や虐待が報じられることもあれば、インドネシア人が組織犯罪の温床となっていると指摘されることもある。これらの問題に共通する背景として指摘されてきたのが、インドネシア人労働者の身元が不確かであることだ。正規のパスポートや

就労ビザなしでマレーシアに入国し、外国人労働者として登録されないまま働くインドネシア人に対して、マレーシア政府は支援や保護をしようにも手の打ちようがない。

マレーシアに住むインドネシア人の教育にインドネシア政府が本格的に乗り出した直接のきっかけは、2006年ごろにマレーシアの教育制度が変わり、公立学校での外国人子弟受け入れが制限されたことだった。2008年には主に小学生を対象にしたインドネシア学校がコタキナバルに開設されていたが、卒業後はインドネシア領にある中学校に進学しなければならなかった。今回の中学校の開設により、コタキナバルにいながら勉強を続けることができるようになる。

マレーシア政府にとっても、マレーシアに住むインドネシア人向けの教育が整備されることは悪い話ではない。インドネシア人労働者の子どもたちが学校に通うことには、彼らが不法就労者や犯罪者予備軍になることを防ぐ意味がある。

これらの動きは、マレーシアの華人と華語学校がたどった歴史を考えるといつそう興味深い。イギリス植民地時代に華人労働者の子弟を対象につくられた華語学校は、独立後にマレーシアの国民教育制度の中に組み込まれた。最近では、マレー人の中にも子どもを華語学校に通わせる人がいる。移民労働者だった華人は今やマレーシア社会の欠かせない一部となっている。インドネシア学校の設立も、マレーシア社会においてインドネシアという要素が不可欠の要素となる過程の始まりかもしれない。(毎月最終火曜日に掲載します)

＜筆者紹介＞

1971年、東京都生まれ。東京大学大学院総合文化研究科修了、学術博士。1997～2000年にインドネシア・アチェ州シアクアラ大学に留学。専門はインドネシアの地域研究。多言語・多宗教社会における災害や紛争への対応過程について研究する。共著に『インド洋海域世界：人とモノの移動』(言叢社)など。日本マレーシア学会運営委員。